

IV 市民活動事例からみたソーシャル・キャピタル培養の可能性

1. 事例分析のねらい、考え方

(1) 事例分析の目的

前章では、アンケート調査を用いた定量的分析を行い、個人の意識や行動面から、ソーシャル・キャピタルとボランティア活動をはじめとする市民活動との間に密接な関係があることを検証した。ここでは、その構造をより具体的に把握するため、多くの人々が関わっている NPO やボランティア団体等の活動について、その事例を分析する。

アンケート調査では時間軸の観点からは断面的な分析しかできなかったのに対して、事例分析では、インタビュー調査等を通じて、過去からの経緯やきっかけ、そして成果といった時間的变化を含めた構造的側面から、市民活動とソーシャル・キャピタルの関係のメカニズムを把握することが可能である。

また、ソーシャル・キャピタルには、先述のとおり、多様な形態・側面があるが、その中でも橋渡し型のソーシャル・キャピタルの培養が注目される。そこで、市民活動の中でも「活動者や関係者の間に、水平的でオープンなネットワークが形成され、その結果、NPO やボランティア団体等が媒介となってコミュニティの中で社会的な信頼・ネットワークが広がっていく」可能性に着目するとともに、そのような動きを推進・促進する要素は何かについて把握することを、事例分析の目的とした。

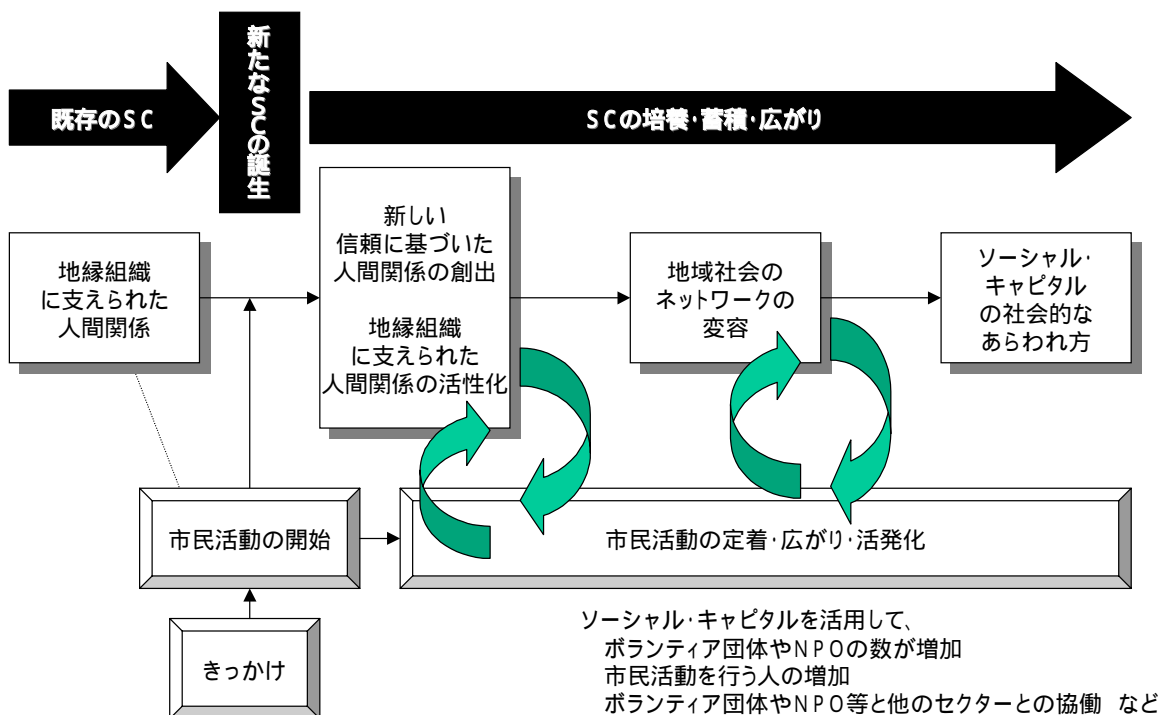
(2) 事例調査の視点

我が国の地域コミュニティにおいては、加入率が低下するなど停滞する傾向にあるとはいえ、既存の地縁組織が地域コミュニティを支える上で機能し、地域住民の関係性に影響を与えている。そこで事例調査に当たっては、主として地縁組織に支えられたそれまでのネットワークとの関係を捉えながら、既存の人間関係とは違った市民活動が新たに生まれることによって、地域社会のネットワークがどのように変容しているのかという視点に立って、ソーシャル・キャピタルと市民活動の関係について把握した(図表 IV-1 参照)。具体的には、

- (i) どのようにして市民活動が始まり、新しいソーシャル・キャピタルの誕生に結びついたのか
- (ii) 地域社会の中で市民活動の展開がどのような広がりを見せ、地域社会の信

頼・ネットワーク（ソーシャル・キャピタル）を変容させているのか、
 (iii)さらに社会的な成果としてはどのようなあらわれ方をしているのか
 について整理し、これを基に、地域社会におけるソーシャル・キャピタルの変容
 を可能にする要素とその要素間の関係性について考察する。

図表 IV-1 ソーシャル・キャピタルと市民活動の関係についての事例調査の視点(仮説)



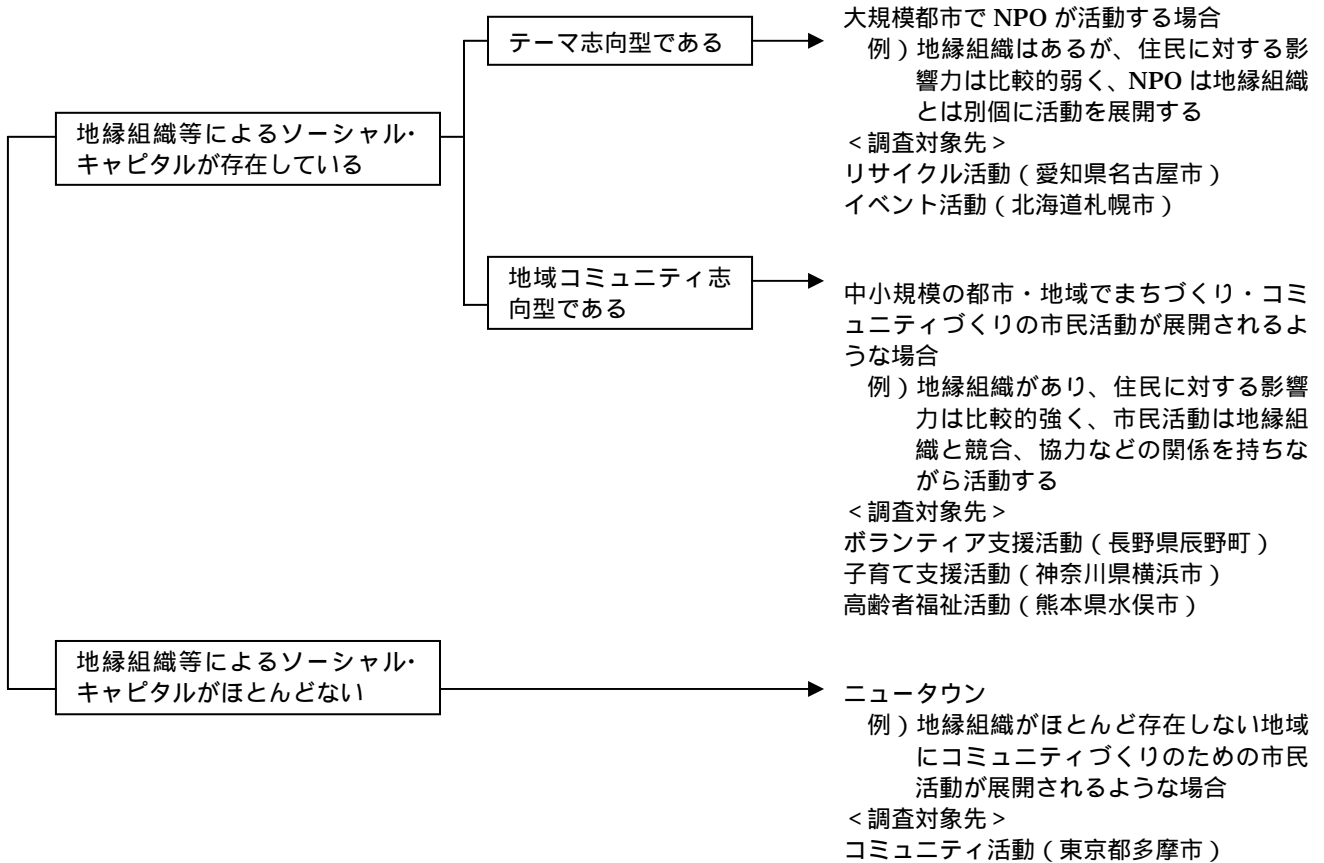
(3) 調査対象

事例については、先述のとおり、地域社会のソーシャル・キャピタルの変容に着目することから、(i)地縁組織によるソーシャル・キャピタルの蓄積があるかどうかと、(ii)市民活動が地域コミュニティ志向型かどうかという観点から、いくつかの活動を調査した。市民活動の地域コミュニティ志向型とは、活動のタイプとして、一定のまとまりのある地域コミュニティを対象としているものを想定している。そうでないタイプとしては、地理的な範囲はあまり重要視せず活動を展開しており、かつ活動の目的が特定化されている市民活動を、テーマ志向型とした。

具体的な調査対象は、図表 IV-2 のとおりである。

図表 IV-2 既存のソーシャル・キャピタルの蓄積状況と市民活動のタイプに基づく調査対象先の分類

【市民活動のタイプ】



2. 事例分析によるソーシャル・キャピタル培養のプロセス

以下では、先に示した類型に沿って、市民活動が地域社会におけるソーシャル・キャピタルの培養にどのように結びついているのかについてその可能性を検証する。

(1) 地縁組織等によるソーシャル・キャピタルが存在している場合

地縁組織等によるソーシャル・キャピタルが存在している場合では、(i)市民活動がテーマ志向であるタイプと、(ii)市民活動が地域コミュニティ志向であるタイプについて調査したが、以下でみるように、後者の場合については、前者の場合と比べて、活動地域の重なり具合から、地縁組織等の既存のネットワークとの間で何らかの関係が生じやすい。それが摩擦・対立の関係になる場合も指摘されるところであるが、今回の調査では比較的、連携・協力関係を導き出しているとみられる事例を調査した。さらにNPOとの関わりの中でさらに影響を受けて、地縁組織等が自らの組織内ネットワークのありようを一部変化させ、組織を活性化させる場合もある。

(i) 事例の概要

(市民活動がテーマ志向であるタイプ)

ここでは、大規模な都市で行われているテーマ志向の市民活動として、リサイクル活動（愛知県名古屋市）と、イベント活動（北海道札幌市）の事例を検討する。両事例は大規模な都市を中心とした市民活動であり、地縁組織等に代表されるソーシャル・キャピタルが既に存在するが、地縁組織の住民に対する影響力は比較的小さいものと考えられる。

リサイクル活動事例

- ・ 1980年、リサイクル・環境問題というテーマを追求するNPOが発足した。
- ・ 資源リサイクル（リサイクル・ステーション等）、グリーンエネルギー（省エネシステム普及等）、リユース支援（フリーマーケット等）、環境教育（講座開催等）などに関する活動を展開している。

イベント活動事例

- ・ 1992年より祭りを開催している。
- ・ 同祭は2002年には参加者（祭りの踊り子）数が約4.4万人、観客動員が150万人を超える一大イベントとなっている。

(市民活動が地域コミュニティ志向であるタイプ)

ここでは、中小規模の都市・地域で行われている地域コミュニティ志向の市民活動として、ボランティア支援活動(長野県辰野町)、子育て支援活動(神奈川県横浜市)、高齢者福祉活動(熊本県水俣市)の事例を検討する。

これらの事例は、中小規模の都市・地域における活動で、地縁組織が存在し、住民に対する影響力も強いいため、市民活動は地縁組織と競合あるいは協力といった関係を持ち、相互に影響しあう傾向にある。

ボランティア支援活動事例

- ・15年前に社会福祉協議会によりボランティアセンターが設立され、ボランティア・コーディネーション機能が確立された。
- ・現在では、人口2万人の町で、ボランティアセンターに登録しているだけでも115のボランティア団体・NPOが活動を展開しており、地域のニーズに対応するサービスの選択肢の多様化、地域活性化が実現している。

子育て支援活動事例

- ・2000年に、店舗数約50の商店街の空き店舗に、0~3歳児と親のための気軽な交流拠点を目指すNPOが入居した。
- ・NPOを核として地域の親子の間にネットワークが広がっていき、また、NPOのサービスを利用するために来街する若い親子が増え、商店街が賑わいを取り戻している。

高齢者福祉活動事例

- ・1995年から社会福祉協議会が呼びかけている、地域の高齢者に対する訪問活動。
- ・活動方法や活動内容は基本的ルールの遵守を除けば各地区の自主性に任せられており、各地区が訪問活動以外の活動(会食会、買い物代行等)についても独自に工夫して多彩に展開している。

(ii)市民活動による新しいソーシャル・キャピタルの醸成

(市民活動がテーマ志向であるタイプ)

先駆性

他地域で成功しているリサイクルや祭りの取組みを知ったリーダーが、自分の地域にも導入したいと考えたことが活動開始のきっかけとなっている。リーダーの先駆的な発案と実現に向けての行動が、新しいソーシャル・キャピタルを醸成するきっかけとなった。

リサイクル活動事例

- ・東京と大阪にリサイクル団体があることを知った現在の代表理事が、地元にもリサイクル団体をつくらうと考えたことが団体創設のきっかけであった。

イベント活動事例

- ・現在の専務理事が高知の祭りを見て感動し、これを地元でも行いたいと考えたことがきっかけとなった。

リーダーシップ（活動者や理解者を得るためのリーダーによる働きかけ）

その後、それぞれのリーダーは、リサイクルの重要性、あるいは祭りのすばらしさについて、周囲の人に働きかけ、あるいはマスコミ等を通じて広く訴えることによって、共感する人々を増やしていった。この過程で、共通の関心のもとに、これまで出会わなかった人々が集まり、信頼関係ができていった。

テーマ志向の市民活動において、リーダーが働きかける相手は特定の地域の住民に限定されない。そして、テーマの公共性や活動の専門性が魅力となって、地域を超えた幅広い人々の参画を得ることが可能になる。そのため、テーマ志向の市民活動は、地域コミュニティを越えて幅広いネットワークを構築する傾向が強いのが特色である。

リサイクル活動事例

- ・活動開始時、マスコミに活動を知らせる手紙を書いた。それにより好意的に報道されたこともあって、同会の設立準備会では見ず知らずのメンバーが50人ほど集まった。
- ・新たなプロジェクトを始めるごとにボランティアのメンバーを集めた。その中で、積極的な人が団体のスタッフとして定着していった。

イベント活動事例

- ・かつて学園祭で模擬店を開催した学生仲間達の理解と協力を得て、祭りの開催に向けて準備を始めた。

こうして、団体内で「リサイクル」や「イベント開催」という目的を共有し、活動を通じて相互の信頼が生まれ、ネットワークが形成されていった。ここに新しいソーシャル・キャピタルが誕生することになる。

（市民活動が地域コミュニティ志向であるタイプ）

先駆性、あるいは課題発見力

子育て中の専業主婦の育児不安やストレスへの危機感、高齢化の進展に対する危機意識が、一部の住民に芽生えたことが活動のきっかけとなっている。このように、地域の課題を先駆的に発見し、危機意識を抱くことが、地域志向の強い市民活動のきっかけとなっている例が多い。

こうしたきっかけづくりは、住民や市民団体だけが担うわけではなく、市町村や既存の機関等が行う場合もありうる。高齢者福祉活動事例の場合、

補助事業の対象となったことも活動のきっかけの一つとなっている。また、ボランティア支援活動事例では、ボランティア・コーディネーターが、地域住民の課題発見力を高めるための取組みを行い、自ら発見した課題への対応に自分で取り組みたいと考えた人々同士をつなげるなどして仲間づくりの支援をしている。

ボランティア支援活動事例

- ・ボランティアセンターは、町内のボランティア活動に関心のある人々を結びつけ、ボランティア団体の組織化の支援を行うとともに、地域の課題を自ら発見する“気づき”を促進するための講座を開設し住民の意識向上に地道な取組みを行ってきた。

子育て支援活動事例

- ・都市に住む子育て中の専業主婦のなかには、子育てに家族の協力が得られずに毎日子どもと二人きりで過ごす状態にある人々があり、育児に関する強いストレスと不安感を抱え、地域で孤立して暮らしている。
- ・このような体験をした母親達が集まり、どうしたらよいかを模索するなかで、東京で0~3歳児とその親のための居場所を提供していた活動と出会った。この取組みを自分達で始めようと、子どもと親が気軽に立ち寄ることができる「もう一つの家づくり」を目指してNPOを立ち上げた。

高齢者福祉活動事例

- ・高齢化、核家族化、過疎化の進展が、「孤独死」の増加などに対する危機意識を高めた。こうした危機意識を共有する人々（福祉・医療関係など）を中心に、1994年、高齢者宅の訪問活動を検討する委員会（社会福祉協議会が事務局）が発足。
- ・この委員会で、訪問活動のルールの検討が行われた。
- ・国庫補助を受けて「ふれあいのまちづくり事業」を展開することとなったことも委員会立ち上げの一つのきっかけとなっている。

リーダーシップ（活動者や理解者を得るためのリーダーによる働きかけ）

地域コミュニティ志向の市民活動は、活動の性質上からも発見した課題を共有するために、地域の各方面に働きかけていく。これにより、活動への賛同者や理解者を地域内に増やしていくと共に、地域内に新たなネットワークを形成していくことにつながっていく。

また、ボランティア支援活動事例では、地域の課題に対応する活動をしたいと考えている人が賛同者や理解者を増やしていくときのサポートを行っている。既に面識があってある程度同じ関心を共有している人々がつながることは比較的容易であるが、自分が発見した地域課題に共通の理解をもってくれそうな人を探すことから始める場合には、そこになんらかのサポートがあると、人と人との関係づくりがうまくいくことが多い。

ボランティア支援活動事例

- ・ボランティアセンターは、“町のいいところ発見”と銘打って、地域の問題や課題に自ら気付いていくという講習会（ボランティア・スクール）を実施している。総合的な学習の時間が始まってからは、地元の中学校や高校にもボランティア・コーディネーターが出かけていって、生徒を対象としたボランティア・スクールを実施している。
- ・講習会では、自分で発見した地域の課題のなかで、自分でやれそうなことを絞り込み、そのテーマが共通している人々のグループがいくつか誕生する。これを母体にボランティア活動が生まれていくこともある。
- ・しかし、自分が発見した地域の課題に共感してくれる人が見つからない場合には、ボランティアセンターの機関誌やネットワークを活用して呼びかけを行う等の支援をする。

子育て支援活動事例

- ・NPOの設立メンバーは、自分達の活動のモデルとした東京の活動のキーパーソンを招いて講演会を開催し、そこで、専業主婦と未就園児の居場所の意義を理解してもらい、活動メンバーを募った。
- ・また、NPOの活動拠点は、駅前商店街という利便性の高い場所にあり、口コミで利用者が広がっている。

高齢者福祉活動事例

- ・この活動を開始する際は、まず市内の各地区で懇談会を開催する。見た人が自分の地域について考えさせられるような内容のビデオを社会福祉協議会で作成し、懇談会で上映する。ビデオや口頭の説明によって、高齢化に関する危機意識を醸成し、活動（ボランティアによる高齢者の安否確認のための訪問活動）への参加を呼びかける。

こうして、地縁組織等に代表される既存のソーシャル・キャピタルとは異なるネットワークが地域社会に形成され、その中で、危機意識・問題意識の共有や、相互の信頼が醸成されていく。新しいソーシャル・キャピタルの誕生である。

子育て支援活動事例

- ・NPOのサービスを利用することを通じて、これまで地域で孤立していた専業主婦で子育て中の親達が出会い、お互いに助け合う信頼関係を築いていった。
- ・また、NPOの活動には、高齢者や学生等がボランティアとして参加しており、地域の異世代の人々が出会い、信頼関係を築いている。

高齢者福祉活動事例

- ・活動を進めるに従って、訪問活動を受ける高齢者と訪問活動を行うボランティアの間、あるいはボランティア同士で、新たな信頼関係が創出されていった。

(iii)新しいソーシャル・キャピタルの広がり（市民活動の展開）

（市民活動がテーマ志向であるタイプ）

市民活動が既存のソーシャル・キャピタルを活用

市民活動が展開・拡大していくなかで、既存のソーシャル・キャピタルも活用しながら、新しいソーシャル・キャピタルは広がっていく。特にテーマ志向のNPOは、テーマに関する高い専門性を活かして、多種多様な個人や組織のコミュニケーションを介在する「場」や「核」として機能することがある。そうした場を提供することで、新しいソーシャル・キャピタルが活性化していくことにつながっていく。

リサイクル活動事例

- ・創設当初から意識して「市民、企業、行政、マスコミ、市民団体の五位（ごみ）一体」という言葉を掲げていた。リサイクルに関連するイベント（フリーマーケット等）を開催する際、開催する場所の企業や地域の協力が必要になることから、次第にこの理念は具体化していくことになった。
- ・例えば、資源ごみを回収する仕組みである「リサイクル・ステーション」に関しては、市民は人材（「市民リサイクラー」と呼ばれる有償ボランティア）を、企業や行政は資金を、マスコミは宣伝機能をそれぞれ提供し、全体の仕組みづくりをNPOが担った。また、商店街や学区等の地縁組織が場所（資源ごみを回収する拠点で、住民になじみのある場所であることが求められる）を提供する地域もある。
- ・言い換えれば、NPOを核とするソーシャル・キャピタル（ネットワークや信頼）が既存のソーシャル・キャピタルを活用することによって、リサイクル活動に必要な資源（人、金、情報など）を確保することが可能になった。

イベント活動事例

- ・祭りの踊りに参加するグループとして、青年会議所、商工会婦人部、小中学校のPTA、町内会、企業、大学などのチャンネルを利用し、多様なコミュニティの参加を戦略的に働きかけた。地域のキーマンの発掘、参加組織への作業分担依頼など、それぞれのネットワークの活性化もねらった取組みが行われた。一方、踊りのルールは簡単なものとし、参加チームは、音楽も衣裳も振り付けも自由に考えることが出来ることとしている。

既存のソーシャル・キャピタルが市民活動を活用

一方、既存のソーシャル・キャピタルが市民活動によって培養された新しいソーシャル・キャピタルを活用することもある。NPOと協力して活動することで、商店街が地域社会からの信頼を獲得する場合などである。

リサイクル活動事例

- ・前述の「リサイクル・ステーション」で場所を提供した商店街は、NPOとリサイクル活動という社会貢献活動を行うことを通じて、地域社会からの信頼を得ることに成功している。

既存のソーシャル・キャピタルの活性化

市民活動がテーマ志向であるタイプの場合には、既存のソーシャル・キャピタルが、市民活動によって培養された新しいソーシャル・キャピタルに影響を受けて活性化していく例がみられた。市民活動に刺激を受けたり働きかけを受けて、従来の組織内の人間関係のありようを大きく変化させるわけではないものの、地縁組織が生き生きと活動を始めたり、新たな活動を始めたりする場合である。

リサイクル活動事例

- ・NPOのリサイクル活動に影響を受けて、子ども会がごみの分別指導を行うなどの活動があらわれるようになった。

(市民活動が地域コミュニティ志向であるタイプ)

市民活動が既存のソーシャル・キャピタルを活用

地域コミュニティを志向する市民活動にとって、既存のソーシャル・キャピタルを活用することは、課題解決のために重要な方法である。高齢者福祉活動事例では、既存のソーシャル・キャピタルをうまく活用することで、市民活動が円滑に立ち上がり、新しいソーシャル・キャピタルが広がりを見せていった。

高齢者福祉活動事例

- ・活動を始める際に、あらかじめ、民生委員、老人会、婦人会等の地区の有力者と打ち合わせ会を開催し、地域の現状（高齢化等）に関する共通認識を持つと同時に、住民への参加呼びかけへの協力を依頼した。その上で、地区毎に、住民を対象とした「懇談会」を開催し、高齢化に関する意識を高めてもらうように情報提供を行った。
- ・こうした協力関係の背景には、それまでにも地縁組織と社会福祉協議会との間に必要に応じ連携して活動を行う関係があった。

既存のソーシャル・キャピタルの活性化、変容

市民活動によって生まれた新たなソーシャル・キャピタルは、自主的・目的的なつながりを志向し、縦型の人間関係ではなく水平的なネットワークを志向する傾向がある。また、内部だけでなく、外部とのネットワークも上手に活用する場合がみられる。地域コミュニティ志向の市民活動の場

合も、テーマ志向の市民活動の場合と同様に、市民活動によって生まれた新しいソーシャル・キャピタルが既存のソーシャル・キャピタルに対して影響を与えていく場合がある。影響の度合いをみると、まず、テーマ志向の市民活動の場合でみられたように、既存のソーシャル・キャピタルが活性化している例がみられる。さらに、既存のソーシャル・キャピタルが変容している例もみられた。

地域コミュニティ志向の市民活動を行おうとする NPO にとっては、地縁組織等に代表される既存のソーシャル・キャピタルとの連携が活動の成否を左右する場合がある。このため、地域コミュニティ志向の NPO のなかには、自らが設定した地域課題の解決に向けて、地縁組織等に働きかけを行い、協力関係や協働関係を築いていくことがある。この過程を通じて、縦型の情報伝達や意思決定方法等（垂直的なネットワーク）によって硬直化していた地縁組織等が、自発的・主体的な参加のもとに対等な人間関係を築いて活動を展開する（水平的なネットワーク）NPO に刺激を受けて、自らの活動を活性化させたり、組織内部のネットワークのありようを水平的なものに変化させていったりする例がみられた。すなわち、市民活動によって醸成された新しいソーシャル・キャピタルとのかかわりによって既存ソーシャル・キャピタルも変容し、地域社会にとってより課題解決力の高いソーシャル・キャピタルが生まれたのだといえよう。

具体的にみると、ボランティア支援活動事例においては、市民活動を通じて培養されたソーシャル・キャピタルが、既存のソーシャル・キャピタルをゆるやかに変容させ、地縁組織等の活性化に貢献している例がみられた。ただし、新しいソーシャル・キャピタル側からの働きかけで容易に既存のソーシャル・キャピタルが変容していくかということ、それは難しいことも指摘された。既存のソーシャル・キャピタルのなかで一定の役割をもっている人が市民活動に参加し、新しいソーシャル・キャピタルのなかで水平的なネットワークを体得したうえで、もう一度既存のソーシャル・キャピタルの組織のなかで一定の役割をもって活動を行うときに、垂直的なネットワークの一部が徐々に水平的なネットワークへと変容している。

< 既存のソーシャル・キャピタルの活性化 >

子育て支援活動事例

- ・当初商店街は NPO について十分な知識がなく、非営利組織が家賃を払っていけるのかなどの不安の声も聞かれた。
- ・しかし、NPO の活動が軌道にのり、多くの若い親子が商店街に来るようになると、店主のなかには NPO の活動を支援してくれる理解者もあらわれるようになった。
- ・現在では、商店街と NPO が互いのイベントに協力するようになるなど、相互の活

性化のために協働関係を構築している。また、NPO 代表が商店街振興組合連合会の役員となって活動するなど、商店街と NPO の連携が日常的なレベルで行われている。

< 既存のソーシャル・キャピタルの変容 >

ボランティア支援活動事例

- ・ボランティア団体のリーダーであった人たちが、居住地区の自治組織の役員や婦人団体役員などに就任することになった。
- ・この人々は、まず、意思決定の方法を、より多くの関係者が十分な話し合いをし、全員参加で決めるという方法にきりかえていった。当初は、なかなか意見が出ない状況であったが、現在では自発的な発言が増えている。みんなで決めたことであるという意識が生まれ、決めたことの実現に向かって主体的に動く人が増えてきた。
- ・また、水害を受けた地区で、他の地区のボランティアの力を積極的に借りていこうとする動きがみられるようになり、地区間の連繫・協力関係が芽生えてきた。

(iv) 地域全体のソーシャル・キャピタルのあらわれ方（成果）

市民活動がテーマ志向であるタイプと地域コミュニティ志向であるタイプの両方において、市民活動によって醸成されたソーシャル・キャピタルや活性化された既存のソーシャル・キャピタルによって、地域の課題に多くの人が取組み（フリーライダーの減少）、行政サービス以外にも地域密着型の課題対応の選択肢が増えることになった例がみられた。これによって、地域の課題解決のための力が向上することになる。

また、地域に愛着を持つ人が増えることも、ソーシャル・キャピタル醸成の成果であり、これがさらなるソーシャル・キャピタルの広がりにつながっていくことになる。

リサイクル活動事例

- ・廃棄物処分場が大幅に不足し、1999 年には「ごみ非常事態宣言」が発令されるに到った。そのため、前述の「リサイクル・ステーション」は、市からもその活動拡大が要請されるほどであった。そして現在では「リサイクル・ステーション」運営の主体は NPO から「市民リサイクラー」と呼ばれる地域住民に移りつつある。
- ・この NPO の活動のうち、不要品のデータベース事業は市に譲渡され、有機野菜等の販売活動は独立して株式会社となった。NPO が環境に関する様々な事業のインキュベーション機能を果たしているといえる。

イベント活動事例

- ・2002 年で 11 回目を迎えたこの祭りは、4000 人規模のボランティアに支えられている。この活動が、地域のボランティア活動の活性化に寄与し、また、観光客の増加にもつながっているとみられる。

ボランティア支援活動事例

- ・ボランティアセンターの取組みの結果、人口規模の小さな町に 115 以上のボランティア団体・NPO が活動を展開しており、地域の様々なニーズにきめ細かく対応

している。

- ・自ら地域の課題を発見して対応していく力をつけた人々が増えており、共通の課題やテーマを介して、知らない人とも関係を築いていくことができる土壌になっている。

子育て支援活動事例

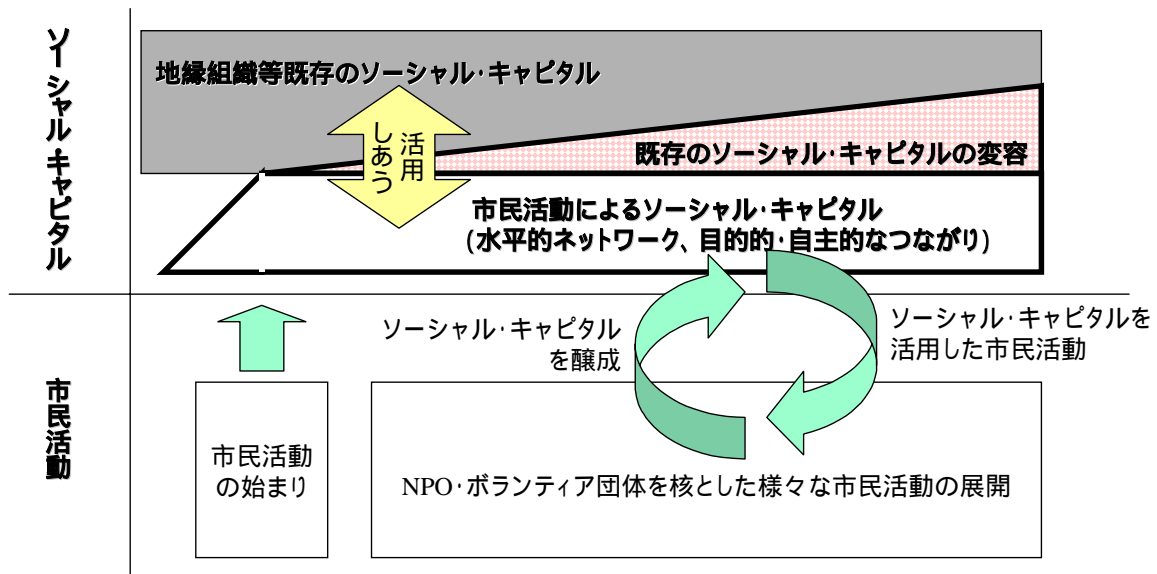
- ・公的サービスがカバーしていない子育て支援ニーズに、地域の母親達が NPO を立ち上げて自ら取組み、孤立しがちな専業主婦の若い母親達の不安やストレスを軽減するサービスを提供している。
- ・この NPO を核として、これまで会うことのなかった、地域の若い母親達、子育て支援ボランティアをしている高齢者や学生、商店街の人々等の間に、信頼関係とネットワークが生まれてきている。

高齢者福祉活動事例

- ・地域の福祉力が向上した（高齢者の非常事態の早期発見、地域の潜在的な福祉ニーズの把握、的確な福祉情報の伝達が可能になった）。
- ・ボランティアの地域への愛着が高まるとともに、ボランティア同士の（地域を超えた）連帯感が醸成されている。

図表 IV-3 ソーシャル・キャピタルと市民活動のメカニズムのパターン・イメージ

(i) 地縁組織等によるソーシャル・キャピタルが存在している場合



(2) 地縁組織等によるソーシャル・キャピタルがほとんどない場合

(i) 事例の概要

ここでは、地縁組織がほとんど存在していない、あるいはその影響力がほとんどない、いわゆる「ニュータウン」における市民活動として、コミュニティ活動（東京都多摩市）の事例を検討する。

コミュニティ活動事例

- ・住民の暮らしを様々な確度から支援することを目的に活動している NPO。
- ・メーリングリストやホームページ、電子掲示板や地域情報誌などを通じてコミュニティ形成を図っている。さらに、ボランティア支援、コーポラティブ住宅づくり、家庭料理のお裾分け活動、堆肥化事業など様々な市民活動が派生している。

(ii) 市民活動による新しいソーシャル・キャピタルの醸成

先駆性、あるいは課題発見力

既存のソーシャル・キャピタルがほとんどない地域では、ソーシャル・キャピタルが機能していない状態に対する危機意識が、そもそものきっかけとなっている。

コミュニティ活動事例

- ・高齢者になってもこの地で暮らしていかなければならないにもかかわらず、地域住民が互いに目線を避け挨拶をしない人間関係であることについて、現理事長が危機意識を持ったのがきっかけである。

リーダーシップ（活動者や理解者を得るためのリーダーによる働きかけ）

他の類型と同様に、リーダーが地域の人々に問題意識の共有を働きかけていった。コミュニティ活動事例では、メーリングリストやホームページ等のインターネットを活用して、同時に多くの人々の間で情報交換をしたり、各自の都合のよい時間帯に情報の受発信をしたりすることを可能としているのが特徴である。

コミュニティ活動事例

- ・周囲の人に呼びかけ、1996年に有志により地域イベントや連絡協議会を設立した。また、1997年には研究大会で取組みの発表を行い、多くの賛同者を得た。
- ・1998年からメーリングリストやホームページ等、インターネットを活用した活動

を始めた。そして、1999年にNPOを設立した。

- ・積極的にメディアに登場することで、住民に対して「わかりやすい」「目立つ」存在になることを心がけた。

こうして、人々が気軽に集まり、思い思いのボランティア活動などを行う場が誕生する。新しいソーシャル・キャピタルの醸成である。

(iii)新しいソーシャル・キャピタルの広がり（市民活動の展開）

NPOに関わる人々の間に信頼関係が生まれ、ソーシャル・キャピタルが醸成されたことで、それまで出会わなかった人々が結びつき合い、自主的に多様な市民活動が展開していくことになった。

コミュニティ活動事例

- ・NPOが地域住民にとっての公共空間であり、ボランティア活動やコミュニティビジネスのゆりかごとなっている。高速インターネット促進事業、地域の情報誌・ウェブの運営、分譲団地の自主管理、コーポラティブ住宅づくり、家庭料理のお裾分け支援、堆肥化事業などの活動が派生している。必要性が低下した活動（例えばパソコンの利用支援）は、活動を休止している。こうした活動は、それぞれ自主的に運営されている。活動の参加者は強制されることなく、「自分が喜べる範囲」内だけで参加する。
- ・1999年以降、市から公園内の拠点施設の運営管理事業を受託している。これにより、デジタルの場での情報交換（電子メールのメーリングリスト等）だけでなく、現実の拠点が付加され、直接顔をあわせるコミュニケーションが促進されることとなった。

(iv)地域全体のソーシャル・キャピタルのあらわれ方（成果）

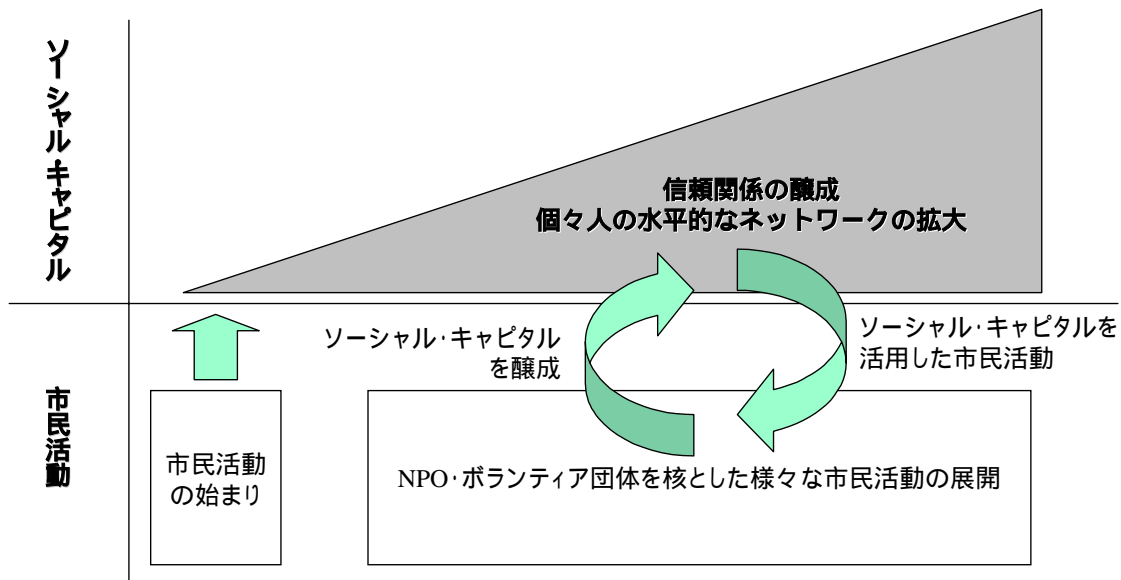
地域住民が世帯ごとに孤立しがちであったニュータウンに、ソーシャル・キャピタルを基盤としてコミュニティが形成され、地域への愛着が増し、地域の課題に住民自らが対応していくことが可能となった例である。

コミュニティ活動事例

- ・困ったときに気軽に助け合うことが出来る信頼関係が醸成され、人間関係が希薄だった人工的な街が、住民主体の街へと変化した。
- ・また、堆肥化事業などを通じて、近隣地域に長年住み続けてきた人々との協働も始まっている。

図表 IV-4 ソーシャル・キャピタルと市民活動のメカニズムのパターン・イメージ

(ii) 地縁組織等によるソーシャル・キャピタルがほとんどない場合



3. ソーシャル・キャピタルの変容をもたらす市民活動の要素

(1) 新しいソーシャル・キャピタルを醸成する市民活動がある

事例調査結果などから、NPO・ボランティア団体等の活動が新たに生まれることにより、新しい信頼関係に基づく人間関係が形成され、この結果、地縁組織等が形成してきた既存のソーシャル・キャピタルとは異なる、新しいソーシャル・キャピタルが誕生している状況があることを示唆することが出来よう。

新しいソーシャル・キャピタルを誕生させるきっかけとなった市民活動が、地縁組織等との協力・連携などの関係づくりが行われることがある。この過程を通じて、さらに既存のソーシャル・キャピタルが新しいソーシャル・キャピタルに影響を受けて一部変容していくこととなり、既存のソーシャル・キャピタルの代表格である地縁組織が活性化していくという成果もみられた。

なお、既存のソーシャル・キャピタルがほとんど存在しなかったニュータウンのような地域では、市民活動が、生活している地域に無関心な人々の目を地域に向けさせ、コミュニティづくりを促進するという役割を果たしている。

また、市民活動の開始をきっかけとして醸成されたソーシャル・キャピタルは、その後新しい市民活動を生む母体となり、多様な市民活動が展開されることによって、より多くの人々の間に信頼関係に基づく水平的なネットワークが拡大されていっている。このように、新しいソーシャル・キャピタルが誕生した後には、市民活動とソーシャル・キャピタルの関係は、お互いに醸成しあう関係となっている。

(2) ソーシャル・キャピタルの変容の条件

市民活動が新しいソーシャル・キャピタルを誕生させ、ときに既存のソーシャル・キャピタルの変容に影響を与えながら、地域コミュニティのなかで、信頼関係に基づいた水平的なネットワークづくりを行っていくという全体のメカニズムのなかで、最も重要なポイントは、ソーシャル・キャピタルの変容がどのように可能となるのかであろう。

事例調査結果に共通してみられたのは、NPO やボランティア団体を立ち上げた人々（当該市民活動の創始者）が、地域の課題を発見し、あるいは、他の地域にあってその地域にないものを発見してそれに対応するための行動を起こしたことが、市民活動のきっかけとなっていることである（(i)先駆性あるいは課題発見力の要素）。活動のテーマを設定した後は、NPO やボランティア団体を立ち上げた人々が、テーマに関する理解者や共に行動してくれる人々を得る

ために、地域に情報の共有化を働きかけ、相互理解を求めることが行われていた((ii)人間関係づくりを行うリーダーシップあるいはコーディネーターの要素)。そして、NPO・ボランティア団体が、団体メンバーが情報を共有化したり、相互理解を深めたりするためのコミュニケーションの場となり、また一方で、他の主体とつながるための場となっていくことによって、ここを拠点とした橋渡し型のソーシャル・キャピタルの培養が始まっていっている((iii)コミュニケーションのための公共空間の要素)。

これらの3つの要素は、(i) (ii) (iii)の順で進んでいくが、(ii)と(iii)については同時並行で進行する場合もある。(i)~(iii)の要素は、NPO やボランティア団体が、これまで出会うことがなかった人々との信頼関係を構築したり、あるいは、これまで既存のソーシャル・キャピタルで結びついていた人々の間を水平的でオープンな関係へと変化させたりしていくための、いわば、人間関係の求心力(人と人とが結びつくきっかけ、理由)となり、さらに、新しく構築された人間関係の間に信頼を醸成し強化していく場となっていくために必要なものであると考えられる。

特に、NPO やボランティア団体という場を支配するルール(規範)のありようが、この場に人々が集まるかどうか、そして、集まり続けてなにかの活動をさらに生んでいく母体となるかどうかに影響を与えていると考えられる。事例調査対象先のNPO やボランティア団体では、参加を強制されない、団体の運営や活動についての意思決定に多くのメンバーが参加できる、メンバー間で情報が共有化されているなどの自主的、水平的なネットワークを醸成するような規範が存在している。

これらの3要素が効果的にバックアップされる外部からの支援がある場合、ソーシャル・キャピタルの変容はより確実に、そして、速い速度で実現していく可能性があるものと考えられる。なお、3要素を社会的にバックアップし、ソーシャル・キャピタルの醸成に資する市民活動を支援していくためには、“ソーシャル・キャピタルの醸成とそれによる成果の実現 更なるソーシャル・キャピタルの培養 より豊かなソーシャル・キャピタルに基づいた成果の実現 ” といった好循環の関係をいかに導いていくかが重要なポイントとなろう(図表 IV-4)。

図表 IV-5 市民活動によるソーシャル・キャピタル変容の可能性（一つのイメージ）

